ブラジル人の宗教意識 *

島　　久　洋

ブラジルには，古代から現代までのあらゆる時代，同じくアフリカ，アジア，ヨーロッパ，そしてアメリカのあらゆる地域の文化，そして多種多様な人種が共存しているゆえに，カトリック教も土着宗教と融合し重層化現象をおこしながら，世界中の宗教が共存している。

ブラジル最南端のリオグランデ・ド・スル（Rio Grande do Sul）州を中心に1990年７月下旬からおよそ１ヶ月間，現地調査を行った際，もっとも印象深かったのは，Espirita系統の祈祷療法を行うカルト（cult）の存在とウンバンダ（Umbanda）系の宗教行事の隆盛とであった（島，1991a）。

ここで，ブラジル全体の宗教の実態について簡単に述べておこう。

石井（1990）によれば，まず，“宗派の共存と融合”と題して，次のように述べている。『ブラジルは人種的にも多様だが，宗教的にも多様である。それぞれの人種が出身地の宗教を携えて移住してきたためでもあろう。

ブラジルの憲法は，信教の自由と正教分離を保障している。ラテン・アメリカ諸国のなかには，カトリックを国教とする国も多いから，ブラジルは特異な存在といえよう。

首都ブラジリアには，カトリック，プロテスタント，佛教，回教等すべて

---

*本報告は，1990年７月下旬からおよそ１ヶ月間にわたる家森幸男教授（島根医大，現京大）のWHO CARDIAC study 国際共同研究ブラジル調査団に同行し，実施した調査に基づいている。同教授と奈良安雄博士にはとりわけお世話になった。
また，ブラジルでの現地調査では，南リオグランデ・カトリック大学老年医学研究所長森口幸雄教授に大変お世話になった。ここに記して感謝する。なお，本報告の資料の整理に際して，平成４年度文部省科学研究費補助金総合研究Ａ（現代青年の価値観と行動様式，課題番号04301010，代表者　秋葉英則）の援助を受けた。

の宗派の教会を集めた宗教区があるが，それはブラジルの宗教に対する包容性を象徴しているといってよい。

サン・パウロの日系人社会を地盤にして，日本の新興宗教も一通り進出している。

ブラジル全土におけるカトリック教会の数は，42,650あるが，プロテスタント教会が，20,338，集会所が13,510，計33,848あって，それ程大きな開きはない（1977年現在）。各州とも，おおむねこの程度の開きを保っているが，注目すべきことは，前首都リオ・デ・ジャネイロを含むリオ・デ・ジャネイロ州においては，カトリック教会が 1,780であるのに対し，プロテスタント教会が 2,344，集会所 1,602合わせて3,946であり，新首都が所在するブラジリア連邦直轄区においても，カトリック教会が58であるのに対し，プロテスタント教会が172，集会所129，計301であって，新旧の首都圏においてプロテスタントの方が教会の数を基準にすれば，優勢であるかにみえることである。

プロテスタントは，教育の向上にも貢献した。聖書を読むことを強調することから，一般的な読み書き能力の向上に資するところ大であったが，コレジオ・ベンネット（リオ・デ・ジャネイロの女学校），ミナス・ジェライス州のラブラスにある農科大学やサン・パウロのマッケンジー大学（工学部が有名）等の有名校を創立したのもプロテスタント教団であった（石井，1990，pp. 57－58.）。』

次いで，“カトリシズム”と題して，宗教人口の分布を中心にして次のように述べている。

『このように，宗教が多角化されてきているとはいえ，カトリシズムはブラジルの生活一般のなかに浸込んでおり，その根は深い。教会の数はとも角として，表1が示しているように，信者数は微減の傾向があるとはいえ，なお90％前後の線を保っている。そうして，都会より田舎により深く浸透している観がある。小さな部落や町でもカトリック教会の尖塔が空を高く指している。赤い土と広漠とした平原の中に点在する部落や町の人々は，教会に出かけ，ミサが済んでも2時頃まで教会の前の広場にたむろしてしゃべっている。

表1　宗教人口の分布（石井，1990，P.59より引用）

宗教別	信者割合（%）				
	1940	1950	1960	1970	1980
総人口	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
カトリック	96.01	93.48	93.08	91.77	88.95
プロテスタント	2.61	3.35	4.03	5.17	6.63
降霊・呪術	1.12	1.59	1.40	1.27	1.29
その他	0.80	0.79	0.94	1.03	1.24
無信仰	0.21	0.53	0.50	0.75	1.64
無回答	0.25	0.26	0.05	0.01	0.25

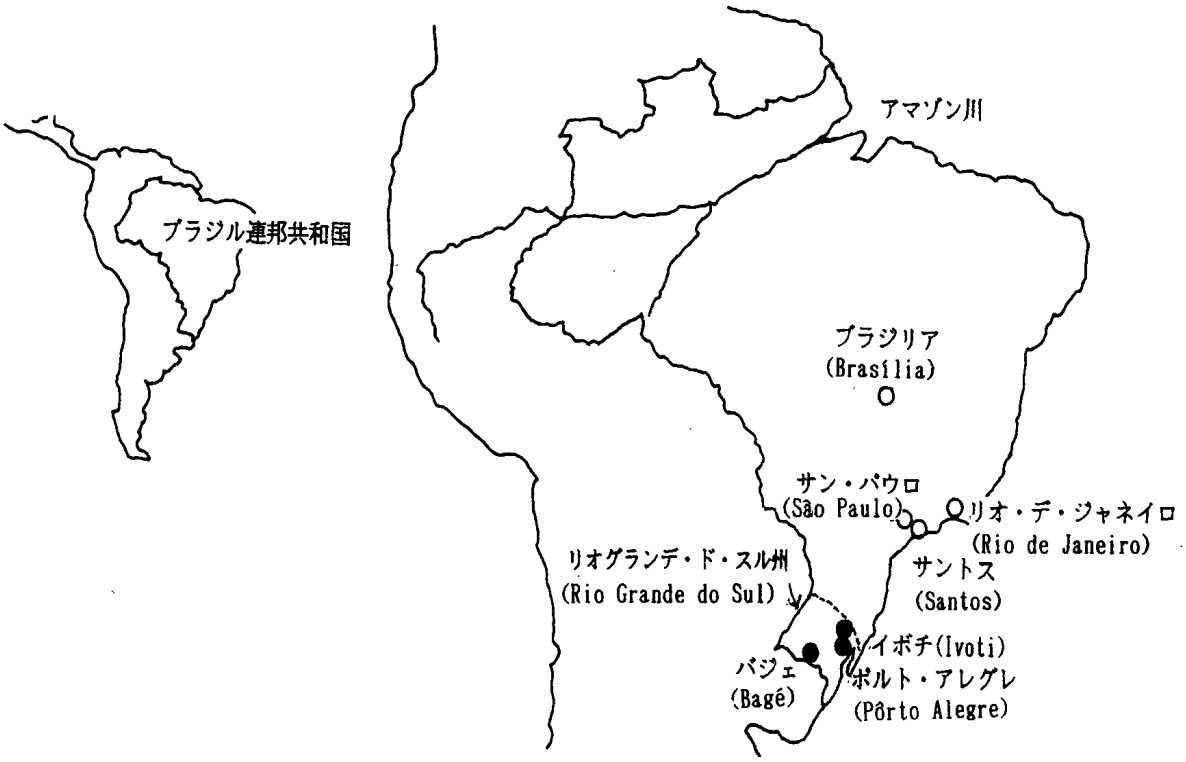
（出所）ＩＢＧＥ，Anuário Estatistico do Brasil　1984 p.150

土曜日は，夕暮時からこの広場が男女交際の場になる。

子供が誕生すれば，古いローマ・カトリックからの名付け親制度の伝統にしたがい，土地の有力者に代父（padrinho），代母になってもらい，カトリック教会で洗礼をうける。代父は，英語でいえばGodfather である。それは，米国でこそイタリア系米国人社会の珍しい行事だが，ブラジルでは全国に普及した社会慣習である。代父母（compadresco）を通じ，子と代父母の間はもちろん，代父母と実の両親との間にも擬制親戚関係が成立し，その代父母からなんらかの恩恵と保護を期待できる。日系移民にも，家では神棚や佛壇の前で合掌しているが，子が生まれると有力なブラジル人に代父母になってもらい，形式上，子を洗礼させるケースが多い。

また，東北部では，カトリックとアフリカ伝来の降霊・呪術的な信仰とが癒着することがある。乾期の干バツ，雨期の豪雨に悩まされるこの地方の住民には，奇蹟に対する異常なあこがれや呪咀，迷信を進ずる心性がある。

表１の降霊・呪術はアフリカ伝来のそればかりではないが，カンドンブレ・ウンパンダのようなアフリカ系の宗教行事の比重が大きい。白人にもこのアフリカの宗教的行事に参加する信者がでているのがブラジルの特色である（石井，1990，pp.58－60.）。』



注：●印の３地域で実施調査を行った

図１　ブラジル連邦共和国の地図

石井（1990）が示している宗教人口の分布の資料（表１）は，1940年から1980年までのブラジルの宗教分布である。我々の実地調査は1990年であり，1980年からちょうど10年後になる。我々の調査対象者数は，ごく少数ではあるが，1990年の宗教分布の一端を示してくれるものと思われる。どのような変化が見られるのであろうか。あるいは，1980年当時とほとんど変わらないのであろうか。

方　法

調査地区

図１に示すように，西にアルゼンチン（Argentina Republic），南にウルガイ(Oriental Republic of Uruguay)と国境を接するブラジル（Federative Republic of Brazil）最南端のリオグランデ・ド・スル(Rio Grande

do Sul) 州は，州の全域がウルグァイからアルゼンチンにまたがる広大なパンパ(Pampas)大草原の一部を構成しており，ブラジル23州のうち，ポルトガル，スペイン，イタリア，ドイツなどヨーロッパ系ブラジル人の人口が一番多い州であり，大学在学率が５％で最も高い州でもある。大学在学率は，ブラジル全土で１％である（島，1992，p.46)。

人口約 120万人の州都ポルト・アレグレ(Pôrto Alegre)は，リオ・デ・ジャネイロ(Rio de Janeiro)，サン・パウロ(São Paulo) に次ぐブラジル第３の都市である。

ここで報告する調査結果は，同州の南端にあるウルグァイとの国境近くのバジェ(Bagé)市で実施した調査に基づいている。

バジェ市は，人口約10万人であり，大牧場主が多く住む町として有名である。

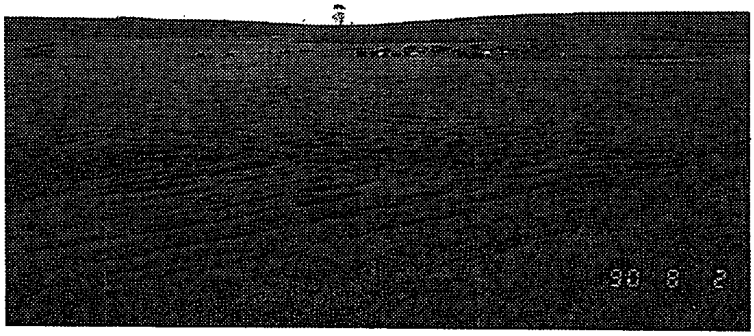


写真１：パンパ大草原における自然放牧の牛

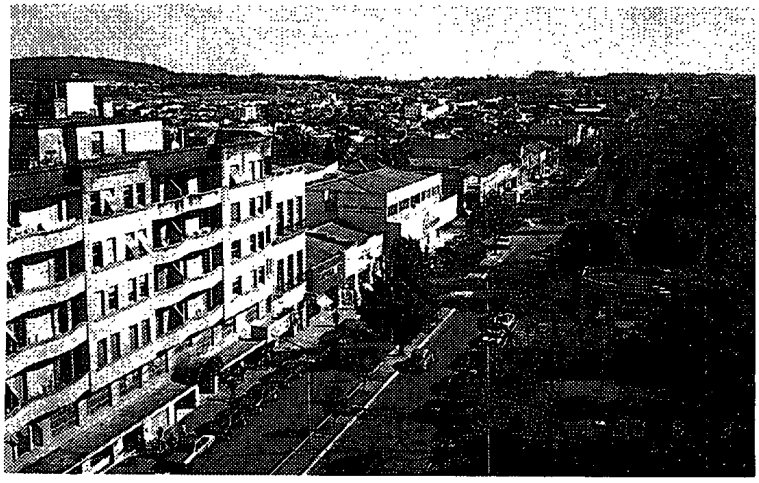


写真２：バジェ（Bagé）市街鳥瞰図

具体的な調査実施場所は，バジェ市の中心部にある市立体育館であり，各調査対象者は同所に来訪し面接調査を受けた。

調査対象

49歳から56歳までの主に50歳代前半のバジェ市民であり，男女それぞれランダムに選んだ。男性100名（年齢幅は49－56歳）と女性103名（年齢幅は，同じく49－56歳）の計203名であり，年齢の中央値は，男女とも52歳である（島，1991b，p. 39の表1参照）。

人種的にはポルトガル系がもっとも多く，他にスペイン，ドイツ，イタリア，そして白系ロシアなどのヨーロッパ系の人々が主体であるが，少数のアラブ系の人々や黒人系の人々も交じっている。この人種構成は，バジェ市民

写真3：体育館で調査を待つバジェ（Bagé）市民

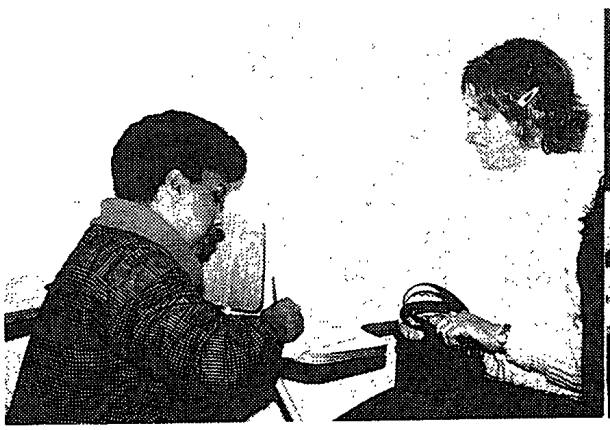


写真4：面接調査風景

写真5：面接調査風景

のそれをほぼ正確に反映している。これらの人々は，すべてブラジル生まれのブラジル育ちの人々であり，しかも９割以上の人がバジェ生まれのバジェ育ちである。

なお，バジェ市には，農業に従事している日系人が10家族位居住しているが，それらの人々は除いてある。

調査時期

1990年７月下旬からおよそ１ヶ月間ブラジルに滞在して各種調査を行ったが，本調査は同年８月２日から同７日までの６日間バジェ市に滞在し実施した調査である。

調査項目

質問項目は全部で48項目であるが，ここでは本報告で分析した項目のみを記す。

なお，実施の面接調査では，すべてポルトガル（ブラジル）語の質問紙を用いた。また，以下に記述する質問項目は，必ずしも質問紙の項目番号順ではないことを断っておく。

まず，フェース・シートで，氏名，生年月日，性別，居住地域を聞いた。

１．宗教は何を信じていますか。

ａ．カトリック

ｂ．ウンバンダ

ｃ．プロテスタント（ピューリタン，アングリカン・チャーチ，バプティスト，等）

ｄ．プロテスタント（ルター派，カルヴイン派，等）

ｅ．エスピリタ

ｆ．無宗教

ｇ．その他

２．あなたの信じる宗教をどの程度知っていますか。

ａ．よく知っている。

b．かなり知っている。

c．少し知っている。

d．ほとんど知らない。

e．全く知らない。

3．カテシズム（公教要理）の勉強をしましたか。

a．はい。　b．いいえ。

4．あなたは教会で結婚式を挙げましたか。

a．はい。　b．いいえ。

5．あなたは教会にどの程度行きますか。

a．いつも行く。

b．時々行く。

c．行かない。

6．あなたは熱心な信者ですか。

a．はい。

b．どちらともいえない。

c．いいえ。

調査手続

すでに述べたように，すべてポルトガル語の質問紙により面接調査した。なお，質問紙はあらかじめ日本語の質問紙を用意し，森口教授夫人の森口カオル女史に，ポルトガル語に翻訳していただいた。女史は，ブラジル生まれの日系二世であり，日本にも長期滞在し，生活をされていた。女史には，単なる直訳ではなく，内容を的確にポルトガル語で表現できるようお骨折りいただいたことに感謝する。

筆者と森口夫人が現地の面接責任者の医師に質問項目および質問の意図を詳しく説明した。実際の面接者は，南リオグランデ・カトリック大学老年医学研究所の医師とバジェ市の医師および看護婦数名である。

筆者は面接中，被験者を観察し，面接終了後，質問紙を点検して不備な点

があれば，面接者に指示して補足面接を行わせた。また，面接時間は，48項目全体を通して，普通約30分である。

結　果

まず，“宗教は何を信じていますか（Qual a sua religião？）” という質問1に対する回答の頻度を示したのが表2である。表2に示すように，性別と職種別とに分けて整理した。

職業分類の詳細は，すでに報告してある（島，1991b，pp. 41－43.）けれども，ここでは簡単に，肉体労働，非肉体労働，そして非労働の内容について説明しておく。

まず，男性の肉体労働は，牧童頭，養蜂家，農夫頭など「農業・牧畜」に従事する者5名，柵職人，ペンキ工，塗装工などの「技能職工」9名，バス，タクシー，そして企業や個人の「運転手」10名，各種の工場で働く「工場労働者」13名，そして，小使いや何でも屋の「その他の労働」6名の計43名である。

一方，女性の肉体労働は，農夫である「農業・牧畜」1名，裁縫工，コック，そしてナイフ作り職人の「技能職工」8名，家庭の主婦である「家事労働」51名，そして小使いや雑用係の「その他の労働」16名の計76名である。

次いで，男性の非肉体労働は，弁護士，歯科医，作家などの「専門職」6名，小・中学校の「教師」6名，市町村，州や国の役所に勤める「公務員」8名，銀行員である「事務職」2名，そして，代理店業，不動産業，小売店主などの「商業・サービス業」11名の計33名である。

また，女性の非肉体労働は，大学教授，エコノミスト，インストラクター，助産婦，秘書などの「専門職」6名，小・中学校の「教師」7名，男性と同じく各地域の各種の役所に勤める「公務員」3名，そして，クリーニング店主，行商，露店商，店員などの「商業・サービス業」5名の計21名である。

最後に，非労働の男性は，自宅待機の将兵である「予備役」7名，年金生

表2　性別と職種別の宗教分布（Q1）

	肉体労働者			非肉体労働者			非労働者			合計		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
Católica (カトリック)	33 (76.7)	60 (78.9)	93 (78.2)	25 (75.8)	16 (76.2)	41 (75.9)	19 (79.2)	3 (50.0)	22 (73.3)	77 (77.0)	79 (76.7)	150 (76.8)
Umbanda (アフリカ教)	2 (4.7)	2 (2.6)	4 (3.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (33.3)	2 (6.7)	2 (2.0)	4 (3.9)	6 (3.0)
Protestante * (プロテスタント)	2 (4.7)	8 (10.5)	10 (8.4)	1 (3.0)	1 (4.8)	2 (3.7)	1 (4.2)	1 (16.7)	2 (6.7)	4 (4.0)	10 (9.7)	14 (6.9)
Protestante ** (プロテスタント)	1 (2.3)	0 (0)	1 (0.8)	0 (0)	2 (9.5)	2 (3.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.0)	2 (1.9)	3 (1.5)
Espirita (エスピリタ教)	4 (9.3)	5 (6.6)	9 (7.6)	5 (15.2)	1 (4.8)	6 (11.1)	3 (12.5)	0 (0)	3 (10.0)	12 (12.0)	6 (5.8)	18 (8.9)
無宗教	1 (2.3)	1 (1.3)	2 (1.7)	2 (6.1)	1 (4.8)	3 (5.6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3.0)	2 (1.9)	5 (2.5)
無回答	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (4.2)	0 (0)	1 (3.3)	1 (1.0)	0 (0)	1 (0.5)
調査人数	43 (100)	76 (100)	119 (100)	33 (100)	21 (100)	54 (100)	24 (100)	6 (100)	30 (100)	100 (100)	103 (100)	203 (100)

注：（　）内の数は，調査人数に対する％

* Evangelica(ピューリタン), Episcopal(Anglican church), Batista(バプティスト), など英米系に信者の多いプロテスタント

** ルター派，カルビン派，などヨーロッパ大陸に信者の多いプロテスタント

活者の「退職」15名，そして，身体障害と病気のために年金生活している「その他」２名の計24名である。

他方，非労働の女性は，年金生活者の「退職」６名だけである。

ブラジルでは，20年間継続して仕事に従事すれば，退職しても年金が貰えるのである。教育職の場合，その期間が15年に短縮されるという。それゆえ，40歳代で退職して年金生活に入る人が後を絶たないと言われている。

以上の各職業は，バジェ市のあらゆる職業を網羅していると言える。

宗教人口の分布結果の全体では，表２の右端欄「合計」に示してあるように，やはり，カトリック（Católica）信者が圧倒的に多く，76.8％を占めていることである。次いで，エスピリタの信者が 8.9％の18名もおり，プロテスタント信者の合計17名の 8.4％よりも，１名ではあるけれども上まわっていたことである。

なお，ウンバンダ（Umbanda）の信者数は，６名で３％を占めていた。

もっとも目立った結果は，エスピリタの信者がプロテスタントの信者数を１名と言えども，陵駕していたことである。バジェ市にはエスピリタの教会もあり，熱心な信者の存在がうかがえた。森口カオル女史によれば，近年ブ

写真６：バジェ市にあるEspiritaの教会

ラジル全土でエスピリタの浸透が著しいとのことであった。

直接の比較は無理かも知れないが，ここで参考までに，これらの結果（表２）を表１と比較してみると，次のことが指摘できよう。

まず第一に，カトリック信者が確かに減少していることである。表１の資

料では，1940年から1980年にかけて，カトリック信者数は微減ではあるけれども，90%前後の割合を占めていたのである。ところが，表2では8割を割る76.8%に落ち込んでいるのである。これがブラジル全土の傾向を示しているか否かの確証はないが，少なくともリオグランデ・ド・スル州の傾向を反映したものであると推測できる。

次いで，エスピリタ信者が18名(8.9%）で二番目の信者数を示していたことである。表1には，エスピリタの欄がない。「降霊・呪術」がウンパンダを含めたアフリカ系の宗教であると解釈するならば，「その他」（1980年で1.24%）の内に含まれるか，その出生から「カトリック」(島，1991a，pp.69−72.）の内に含まれるかのどちらかであろう。エスピリタがブラジル全土に浸透しはじめたのがここ数年のことであるという森口カオル女史の言を信しるならば，1980年当時は，「その他」に含まれていたと考えるのが妥当であろう。

三番目に，ウンパンダ信者が6名（3%）もいたことである。1980年当時(表1）は，「降霊・呪術」が1.29%を占めていたにすぎないのである。しかも「降霊・呪術」は，主にブラジル東北部を中心とする信者であるという石井（1990）の指摘が正しいとするならば，アフリカ系住民の少ないバジェ市ですら3%を占めているのだから，ブラジル全土ではさらに多くの信者数を示すと解釈してもよかろう。

四番目に，プロテスタントの信者も増えているということである。全部で17名の8.4%は，1980年の6.63%に比べると微増ではあるが増えているのである。

要するに，1980年のブラジル全土の信者の分布に比べて，1990年のバジェ市の宗教分布は，カトリック信者が12.2%減少した分を，エスピリタが過半数を吸収し，残りをプロテスタントとウンパンダが分けあったと言える。

表2の宗教分布を男女別に比較してみると，カトリックの信者数は，男(77名で77%）女（79%で76.7%）ともほぼ同じ割合を示していた。

特に目立った特徴は，ウンパンダ(男，2名で2%；女，4名で3.9%）と

プロテスタント（合計で，男，5名で5％；女，12名で11.7％）の信者数が男性信者よりも女性信者の方がほぼ倍であったのに対して，逆にエスピリタの信者数が女性信者（6名で5.8％）よりも男性信者（12名で12％）の方がほぼ倍であったことである。

肉体労働，非肉体労働，そして非労働の職種の宗教分布は，ほぼ全体と男女別の傾向をそのまま反映していたけれども，注目すべき特色として，非肉体労働者にウンパンダの信者が1人もいなかったことである。それ以外では，人数が少ないことを無視してあえて言えば，非労働の女性の半数（3名）しかカトリック信者ではなかったことである。

質問1の結果（表2）が示すように，職種別の特徴が極端に現れなかったので，質問2から6までの5つの質問の整理は，宗派別と男女別とを独立変数として整理することにする。なお，プロテスタントについては，質問1では，米英系と大陸系とに分けて質問したけれども，質問2以下では，両者をまとめてプロテスタントとする。それゆえ，宗派は，カトリック，プロテスタント，エスピリタ，そしてウンパンダの4つになる。また，無宗教と無回答は除くので，調査人数は，男性4名と女性2名の計6名減少するゆえに，男性96名と女性101名の計197名になる。

質問2の「あなたの信じる宗教をどの程度知っていますか。」の回答は，「a．よく知っている」，「b．かなり知っている」，「c．少し知っている」，「d．ほとんど知らない」そして「e．全く知らない」をそれぞれ，5，4，3，2，そして1の5段階評定尺度に変えて整理して，性別と宗教別とで平均と標準偏差とを示したのが表3である。表3に基づく分散分析表が表4である。分散分析の結果，宗教要因の主効果のみ統計的な傾向（$F=2.21$，$df=3/189$，$.05<p<.10$）が認められたにすぎない。

宗教要因に統計的な有意差は認められなかったけれども，傾向が認められたので，念のため，全体の誤差平均平方和を分母として個々の平均差の検定を行った。

男女を込みにした宗教別の検定である。

表3　性別と宗教別の信じている宗教の知識の程度（Q2）

		カトリック	プロテスタント	エスピリタ	ウンパンダ	計
男　性	人　数	77	5	12	2	96
	平　均	3.71	4.20	3.83	2.50	3.73
	標準偏差	1.00	0.84	1.12	0.71	1.01
女　性	人　数	79	12	6	4	101
	平　均	3.73	4.00	3.83	3.75	3.78
	標準偏差	0.97	0.85	0.75	1.26	0.92
計	人　数	156	17	18	6	197
	平　均	3.73	4.06	3.83	3.33	3.76
	標準偏差	0.97	0.83	0.99	1.21	0.96

注：5段階評定尺度，点数が高いほど知っている程度が高い。5（よく知っている）-1（全く知らない）

表4　表3に基づく分散分析表

要　因	*SS*	*df*	*MS*	*F*
A（性　別）	91	1	.91	＜1
B（宗教別）	6.21	3	2.07	2.21*
A×B	3.99	3	1.33	1.41
誤　差	177.20	189	.94	

＊.05＜p＜.01 傾向あり

カトリックとプロテスタントの間（F=1.75, df=1／189，$n.s.$），カトリックとエスピリタの間（F＜1，$n.s.$），カトリックとウンパンダの間（F＜1，$n.s.$），プロテスタントとエスピリタの間（F＜1，$n.s.$），そしてエスピリタとウンパンダの間（F=1.20, df=1／189，$n.s.$）においては統計的な有意差が認められなかった。ただし，プロテスタントとウンパンダの間（F=2.72, df=1／189，.05＜p＜.10）にのみ統計的な傾向が認められたのである。プロテスタントとウンパンダの間の傾向が宗教要因の傾向を作り出していたのである。

この結果は，プロテスタントの方（平均得点，4.06）がウンパンダ（平均得点3.33）よりも宗教の知識の程度が高い傾向が認められ，それが宗教の違いによりその信じる宗教の知識に違いがあるという傾向を生み出していたの

である。

単純に数値で比較すれば，プロテスタント＞エスピリタ＞カトリック＞ウンパンダの順に信者の知識の程度が低くなることを示している。これは，プロテスタントが教育熱心であり，ブラジルの教育の向上に貢献したという石井（1990）の記述を裏付ける資料とも言える。

しかし，統計的な有意差が認められなかったので，どの宗教においてもその信者の知識はほぼ同程度とも言える。全体の平均は，3.76であり，宗教の別なく，信者はそれぞれ，かなり知っていたと言えよう。ただし，ウンパンダの信者の知識は，プロテスタントの信者のそれよりは低い傾向にあると言える。

次の質問（Ｑ３）は，カテシズムに関したものである。カテシズム（公教要理，カトリックに入信するための資格審査のようなもの。ただし，カテシズムを勉強したからといって必ずしも入信するとは限らない。）の勉強をし

表５　カテシズム（公教要理）を勉強したか否か（Ｑ３）

		カトリック	プロテスタント	エスピリタ	ウンパンダ	計
男　性	勉強した	46 (59.7)	1 (20)	8 (66.7)	1 (50.0)	56 (58.3)
	しない	31 (40.3)	4 (80)	4 (33.3)	1 (50.0)	40 (41.7)
	人　数	77 (100)	5 (100)	12 (100)	2 (100)	96 (100)
女　性	勉強した	58 (73.4)	8 (66.7)	2 (33.3)	2 (50.0)	70 (69.3)
	しない	21 (26.6)	4 (33.3)	4 (66.7)	2 (50.0)	31 (30.7)
	人　数	79 (100)	12 (100)	6 (100)	4 (100)	101 (100)
計	勉強した	104 (66.7)	9 (52.9)	10 (55.6)	3 (50.0)	126 (64.0)
	しない	52 (33.3)	8 (47.1)	8 (44.4)	3 (50.0)	71 (36.0)
	人　数	156 (100)	17 (100)	18 (100)	6 (100)	197 (100)

注：数字は人数，（　）内の数は性別，宗教別の％を示す。

たか否かというＱ３の質問に対する回答を，性別と宗教別に整理したのが表５である。勉強したという人の性別と宗教別の百分率の角変換値に基づいて分散分析を行ったけれども，あらゆる要因に統計的に有意な差が認められなかった。すなわち，性要因の主効果（x^2=0.287 ，df=1／∞，$n.s.$），宗教要因の主効果（x^2=1.537 ，df=3／∞，$n.s.$），そして性×宗教の交互作用（x^2=4.482 ，df=3／∞，$n.s.$）のすべての要因に有意差が認められなかった。

検定に基づく結論は，宗教と性に関係なく，ある程度勉強していたと言える。全体の勉強した人の割合は64％であり，男女ともどの宗教でも，半数以上の人々が勉強していたと言えるが，数値を子細に検討すれば，男女においても，宗教の違いにおいても多少の特色が見受けられる。

まず第一に，カトリック信者が予想したよりもカテシズムを勉強していないことである。男女を込みにして，カトリック信者の104（66.7％）名，プロテスタント信者の９（52.9％）名，エスピリタ信者の10（55.6％）名，そしてウンパンダ信者の３（50％）名がそれぞれ勉強していた。確かに割合としては，66.7％で一番多いけれども，エスピリタの55.6％，プロテスタントの52.9％，そしてウンパンダの50％らと比べて飛び抜けて多いとは言えないのである。予想では９割を越える人々がカテシズムを勉強しているはずだと考えていた。

次に，男性（53.3％）よりも女性（69.3％）の方が10％以上も多く勉強していたことである。とくにカトリック信者のうちでは，男性の59.7％に対して女性は73.4％の人が勉強していたのである。

さらに，プロテスタントの男性はただ一人（20％）の人しか勉強していないのに対してプロテスタントの女性は８名（66.7％）も勉強していた。性別にみると，プロテスタントと逆の傾向を示していたのはエスピリタの信者である。エスピリタの男性の66.7％（８名）も勉強していたのに，女性は33.3％（２名）しか勉強していなかった。

結論としては，検定結果が示していたように，どの宗教の人々も割合勉強

していたと言える。

次に，Ｑ４の教会で結婚式を挙げたか否かという質問に対する回答結果を，性別と宗教別に示したのが表６である。この場合の教会は，別にキリスト教

表６　教会で結婚式を挙げたか否か（Ｑ４）

		カトリック	プロテスタント	エスピリタ	ウンパンダ	計
男性	挙げた	59 (76.6)	4 (80)	9 (75)	2 (100)	74 (77.1)
	いいえ	18 (23.4)	1 (20)	3 (25)	0 (0)	22 (22.9)
	人数	77 (100)	5 (100)	12 (100)	2 (100)	96 (100)
女性	挙げた	56 (70.9)	9 (75)	5 (83.3)	3 (75)	73 (72.3)
	いいえ	23 (29.1)	3 (25)	1 (16.7)	1 (25)	28 (27.7)
	人数	79 (100)	12 (100)	6 (100)	4 (100)	101 (100)
計	挙げた	115 (73.7)	13 (76.5)	14 (77.8)	5 (83.3)	147 (74.6)
	いいえ	41 (26.3)	4 (23.5)	4 (22.2)	1 (16.7)	50 (25.4)
	人数	156 (100)	17 (100)	18 (100)	6 (100)	197 (100)

注：数字は人数，（　）内の数は性別，宗教別の％を示す。

の教会でなくても，それぞれの宗教の教会であればよい。また，回答には，一回目の結婚は教会であげたが，二回目は違う，あるいはその逆などがあったが，一回でも教会で結婚式を挙げた場合には，「挙げた」に含めておいた。質問３の場合と同じく，表６の百分率の角変換値に基づいて分散分析を行った。分散分析の結果，あらゆる要因に統計的に有意な差が認められなかった。すなわち，性要因の主効果（x^2=1.275，df=1／∞，$n.s.$），宗教要因の主効果（x^2= 2.459，df = 3／∞，$n.s.$），そして性×宗教の交互作用（x^2= 2.241，df=3／∞，$n.s.$）のすべての要因に有意差が認められなかったのである。

検定に基づく結論は，男女の別なく，また宗教の別なく，かなり多くの人々

が教会で結婚式を挙げていたということである。全体で74.6%(147名) の人々が教会で挙式していたのである。男性の77.1% (74名) と女性の72.3% (73名) の人々が教会で挙式したのである。ほとんど性差は認められない。また宗教別の差もほとんどないけれども，%の順に教会での挙式を示すと，ウンパンダ，エスピリタ，プロテスタント，そしてカトリックの順であり，その割合は，それぞれ，83.3%，77.8%，76.5%，そして73.7%であり，ウンパンダの割合が一番多く，カトリックの割合が一番少ないのである。

質問5の教会へ行く程度の回答で，「a．いつも行く」，「b．時々行く」，そして「c．行かない」をそれぞれ，3，2，そして1に変換した3段階評定尺度による性別と宗教別の評定点の平均と標準偏差とを示したのが表7であり，表7に基づく分散分析表が表8である。もちろん，この場合の教会は，キリスト教の教会だけではなく，各宗教の教会を指しているのである。

分散分析の結果，すべての要因に統計的に有意な差が認められなかったのである。

宗教に関係なく，男女ともそれぞれの教会へ時々行くということを示している。全体の平均得点は，2.13点であり，必要を応じて行くのであろう。

表7　性別と宗教別の教会へ行く程度（Q5）

		カトリック	プロテスタント	エスピリタ	ウンパンダ	計
男　性	人　数	77	5	12	2	96
	平　均	1.99	2.60	1.75	2.00	1.99
	標準偏差	0.68	0.89	0.87	0	0.72
女　性	人　数	79	12	6	4	101
	平　均	2.29	2.33	2.00	2.00	2.27
	標準偏差	0.62	0.78	0.89	0	0.65
計	人　数	156	17	18	6	197
	平　均	2.14	2.41	1.83	2.00	2.13
	標準偏差	0.67	0.80	0.86	0	0.69

注：3段階評定尺度，点数が高いほど教会へ行く頻度が多い。3（いつも行く）－1（行かない）

表8　表7に基づく分散分析表

要　因	*SS*	*df*	*MS*	*F*
A（性　別）	.06	1	.16	＜1
B（宗教別）	2.37	3	.79	1.71
A×B	.63	3	.21	＜1
誤　差	87.41	189	.46	

統計的に有意差が認められなかったけれども，数値だけを単純に比較してみれば，男性（平均得点，1.99）よりは女性（平均得点，2.27）の方が教会へ行く頻度が幾分多い。

また，宗教別では，プロテスタント＞カトリック＞ウンパンダ＞エスピリタの順で教会へ行く頻度が少なくなっており，それぞれの平均得点は，2.41，2.14，2.00，そして1.83である。

結論として，男女を問わず，また宗教の違いにかかわりなく，各教会へ時々行っているということである。

最後の質問であるＱ６の回答で，「ａ．熱心である」，「ｂ．どちらともいえない」，そして「ｃ．熱心でない」をそれぞれ，３，２，そして１に変換した３段階評定尺度による性別と宗教別の評定点の平均と標準偏差とを示した

表9　性別と宗教別の信者としての熱心さ（Ｑ６）

		カトリック	プロテスタント	エスピリタ	ウンパンダ	計
男　性	人　数	77	5	12	2	96
	平　均	2.14	2.60	2.25	2.00	2.18
	標準偏差	1.00	0.89	0.97	1.41	0.94
女　性	人　数	79	12	6	4	101
	平　均	2.47	2.50	2.67	3.00	2.50
	標準偏差	0.89	0.91	0.82	0	0.87
計	人　数	156	17	18	6	197
	平　均	2.31	2.53	2.39	2.67	2.35
	標準偏差	0.95	0.87	0.92	0.82	0.94

注：３段階評定尺度，点数が高いほど熱心だと認知している。３（熱心だ）－１（違う）

のが表9であり，表9に基づいた分散分析表が表10である。分散分析の結果，表10に示すように，すべての要因に統計的に有意な差が認められなかった。

表10　表9に基づく分散分析表

要　因	*SS*	*df*	*MS*	*F*
A（性　別）	2.08	1	2.08	3.39
B（宗教別）	0.41	3	0.14	＜1
A×B	1.88	3	0.63	＜1
誤　差	163.88	189	0.87	

すなわち，男女を問わず，宗教の別なく，皆それぞれどちらかと言えば熱心な信者であることを示している。全体の平均得点は2.35であった。また，数値を直接比較すれば，女性（平均得点，2.50）の方が男性（平均得点，2.18）よりも幾分熱心であり，宗教別ではウンパンダ（平均得点，2.67）がもっとも熱心であり，次いで，プロテスタント（平均得点2.53），エスピリタ（平均得点，2.53），カトリック（平均得点，2.31）の順である。

結論としては，検定結果（表10）が示しているように，宗教や性にかかわりなく，皆それぞれ熱心な信者たちであると言える。

考　察

本報告は，ブラジル人の信仰する宗教の分布と，それに附随する信仰形態の現状についての自己認識との報告である。かなり表層的な調査報告であることは否めない。このような調査でも，ブラジルの宗教現状をそれなりに読み取ることが出来るのである。既に述べたように，1990年のブラジルの宗教は，カトリック人口の減少と，それに対応するエスピリタの隆盛およびウンパンダとプロテスタントとの人口増加を本結果は，明確に示しているのである。調査地域が，ブラジル最南端の州であり，さらに州の南端のバジェ市という黒人系人口の少ない所であったにもかかわらず，上記のことを裏付けているのである。表1と表2とを比較してみればより詳細に理解できるであろ

う。もし調査地域がブラジル東北部であったら，ウンパンダとエスピリタの信者はもっと増えていただろうと推察されるのである。この事実は，現実に現地を歩いてみて，肌で感じることが出来た印象を具体的な数字で裏付けたものと言える（表1，表2参照）。

質問2から6までの回答結果を要約すれば，まず，信仰する宗教についての知識（Q2）は，プロテスタントがもっともよく知っており，ウンパンダの信者よりもよく知っているという傾向を示していたけれども，ウンパンダの信者も少し知っており，エスピリタとカトリックも含めて，有意差が認められなかったということは，宗教の別なく，それぞれの信者は自分の信ずる宗教の知識をそれなりにもっていたと言うことである。

次いで，カテシズムの勉強（Q3）も宗教の別なく，半数以上の人々がしていたのである。ただし，もっとも多くの人々が勉強していたカトリックの信者の人々が男女を込みにして66.7%の人々しか勉強していなかったのは意外であった。そして，宗教，男女の別なく，かなり多くの人々がそれぞれの教会で結婚式を挙げていたのである。すなわち，約7割強から8割弱の人々が結婚式を教会で挙げていた（Q4）。

さらに教会へも，男女，宗教の別なく教会へ時々行っており（Q5），同じく，男女，宗教の別なく，信者たちは，自分自身をどちらかといえば熱心な信者であると自己評価していた（Q6）のである。

調査結果は，性差も宗教差も統計的に有意差が認められず，信仰する宗教の知識をそれぞれある程度もっており，カテシズムもそれなりに勉強しており，多くは教会で結婚式を挙げており，教会へも時々行き，自分自身を普通よりは熱心な信者であると自己評価していた。この事実は，カトリックが根づいた社会だからであろうか。あるいは，日本人より宗教心が強いからであろうか。おそらく両方であろう。

ブラジルでは，既成と新興とを問わず，信者による宗教活動はそれなりに活発に行われているのである。

日本の佛教徒は，一部の新興宗教を除き，既成佛教宗派の信徒は，自分の

属する（多くは家伝来の）宗派の知識もほとんどなく，僧侶と接する機会も葬式や法事のときぐらいであり，ほとんど佛典などには興味を示さないのが現状であり，葬式佛教としてのみ社会に存在すると言っても過言ではない。

日本の佛教および佛教徒の現状と比較すれば，ブラジルは，宗教が日常生活の中に根づいている社会であると言える。これらブラジル人の宗教意識についてより深く探求することが今後の課題であろう。

引用文献

石井陽一　1990　社会と文化　(2)宗教．大原美範編　ブラジルーその国土と市場ー．改訂５版　科学新聞社出版局，　pp. 57－60.

島　久洋　1991a 教祖は非業の死を遂げるーブラジル宗教事情．桃山学院大学・キリスト教論集，第27号，63－81.

島　久洋　1991b ブラジル人の“老い”のイメージ．桃山学院大学・国際文化論集，第５号，35－60.

島　久洋　1992　戦後ブラジル移民の宗教意識．桃山学院大学・キリスト教論集，第28号，43－88.

Brazilians' Religious Consciousness

Hisahiro SHIMA

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate religious consciousness of Brazilians.

In August 1990 a study was made of 203 randomly selected males and females aged 49−56 living in Bagé in province of Rio Grande do Sul in the Federal Republic of Brazil.

The surveys were conducted indoors using the facc−sheet method.

The questionnaire consisted of 48 items concerning health, eating habits, family relations and old age as well as religious behabior.

Both questionnaire and interview were conducted in Portuguese.

The religious distribution of Brazilians are presented in Table 1.

Table 1 Religious Distribution of Brazilians in Bagé of Brazil

Religion	Male		Female		Total	
	Number	%	Number	%	Number	%
Católica	77	77	79	76.7	156	76.8
Protestante	5	5	12	11.7	17	8.4
Espirita	12	12	6	5.8	18	8.9
Umbanda	2	2	4	3.9	6	3.0
Without Religion	4	4	2	1.9	6	3.0
Total	100	100	103	100	203	100

We fond Brazilians to be very accepting of and positive toward riligion.

The significant of these results was discussed.